

作品紹介

<防火防災に関する作文>

「最優秀賞」

命の灯を大切に

今治市立大西中学校 二年 高橋 温人

「ウウウウー！」夜の町に大きくサイレンが鳴り響いた。続けて有線放送が入った。火事だそうだ。この町は火事が無いわけではないが、数は少ない。年に数回程度だ。だから、火事が起きた次の日は、ちよつとした騒ぎになる。「ウウウウー！」最初のサイレンから二時間経過したころだっただろうか、消火のサイレンが鳴った。今回は長かったな、ぼくは心の中でつぶやいた。その消火活動に人の命が左右されていることも、懸命に消火活動を行っている人がいることも、深く考えずに。

数年前、ぼくの父は消防団員の一人だった。毎日用があるわけでもなかったから、あまりその内容を知ることがなかった。しかし、まだぼくが幼かったとき、夜にあのサイレンが鳴った日、父は家を飛び出るように消防団が設置されている所へ向かった。かなり急いでいたのを、今でも覚えている。父が家を出て数分後、首謀者のサイレンが聞こえてきた。本当に短い時間で出動していたように思う。父はぼくが寝た後に帰ってきていた。朝起きて玄関を見ると、消防団の服や靴がそのままあった。その火事がどのくらいひどかったか、話は聞いていないが、きつと大変だったのだろう。ぼくが「大変だった？」と父に聞くと、父は「とても疲れたよ。」とだけ返した。今考えると、その消火活動に人の命が左右されるのだから、簡単に「大変だ」とは言えないのだと思う。それに、自分の命も危険にさらされるのだから、疲れるのも当然だ。それでも誰かの命を救うため活動する消防団員を、ぼくは本当にすばらしいと思う。

ぼくは火事の現場において、消すべき火と消してはいけない灯があると考える。一つは火災の火。もう一つは命の灯である。火災の火は一刻も早く消さなければならぬ。と同時に、人の命も灯も守らなければならない。そのためにも、消防団は地域を守るためにも、必ず必要だと思う。地域の消防団は、消防隊が来るまでに、消火の準備または消火活動を行う。消防隊だけでは間に合わないところをサポートしているのだ。それで救われる命はとても多いはずだ。しかし、そんな救世主でさえ、その現場で命を落とす可能性がある。火災が起きた家の主人やその家族は助かって、団員、隊員が命を落としては、それは救命活動失敗と言えらると思う。そうはならないために、まず自分ができる身近なことは、とにかく火事を起こさないことだ。火の危険性をよく知り、安易に火を使わず、もしもの時にはどう対応すればよいか、初期消火の仕方から避難の仕方まで、しっかり学んでおけば、誰も命を落とす心配はなくなる。自分の命を危険にさらしても、地域を守る消防団員。彼らのような人々がいるからこそ、自分たちは安全に暮らしている。そのことに感謝の気持ちを持ち、この先も暮らしていきたい。そして、少しでも火災で命を落とす人がいなくなるよう、自分でできる用心をし、火災を防ぐ方法を学んで、自分もこの地域を守る人になっていきたい。

「優秀賞」

僕にできることは

愛南町立一本松中学校 一年 田原 光

「水だ。水を持って来い。」

叫び声が聞こえた。空気にさえ亀裂を走らせるような、緊迫感が伝わってくる声だった。火事だ。あつという間に建物の形を失わせ、火の勢いは強くなっている。近所の人たちが火を消そうと、田んぼに使われていたポンプで水をかけていた。そこにいち早く駆け付けたのは、地域の消防団の人たちだった。火の延焼を防ぐために、的確に火元を見極め、手際よく消火活動を行っていた。その活動は、消防車と消防隊員の到着によってさらに加速し、僕の予想よりも早かった火の回り以上の速さだった。そして、負傷者を出すことなく、建物火災は鎮火した。

愛南町では、火災が起きた場合、防災無線で消防署から連絡がある。どこで、どういう種類の火災が発生したのか、出動してほしい消防団はどこなのかなどが主な内容である。それを聞いて、消防団の中ですぐに動ける人たちが機敏に行動し消火活動にあたるというシステムだ。この消防本部の判断が、防火に大きく貢献していると思う。

愛南町には、旧町村ごとに、三から四の消防団が存在する。僕が住んでいる一本松地域にも、「二本松方面隊第四分団」があると聞く。消防団員を年齢でみると、二十代後半から四十代半ばの人たちが多い。家庭でも地域でも中心となる年齢の人たちなので、みんな生計を立てるための生業がある。その上に、いざというときの「消防団員」としての仕事も持っているのだ。体力的にも精神的にも大変なことだと思う。僕が一番心を動かされたのは、この消防団員の人たちが、定期的に詰所に保管しているホース等の点検をしたり、消火活動の訓練をしたりしていることだ。僕が通う中学校のグラウンドでも、夜、訓練しているのを見たことがある。誰もが一日の仕事を終えて家に帰りぼつとするその貴重な時間を使っておこなっているのである。「地域の貢献したい」とよく言うけれど、その思いを実際に行動に移している人はどれくらいいるだろうか。そういう僕も、火事を目の当たりにしたとき、一人の傍観者にしかならなかった。学校では火事や地震を想定して繰り返し避難訓練を行っているのに……。

消防団員のある人が、「自分が十分働ける歳になって団員の一人になったんやけん。やらんといけんやろ。大したことはできんけど、自分が任せられたことの中でできることをやったら、誰かの命が助かったり誰かのものが残せたりするけんね。」と言った。では、今の僕には何ができるのか。火災が発生したときは、まず、自分の命を守る意味で、安全を確認して避難すること。興味本位で見に行き消火活動の邪魔をしないこと。火災発生を見つけたときは、近くの大人に連絡し、消防署に通報してもらうことだ。そして、大人になったら、地域の消防団員として、自分にできることをして、地域の役に立ちたいと思っている。